■ ミニレクチャー

# 「百聞一見に如かず」ってほんとう？

津 村 俊 充 （南山短期大学教授）

## ◆はじめに

私たちは、日常生活における人々との相互作用はコミュニケーションをもって行なっています。特に、それらは言葉を用いたコミュニケーションがほとんどであるといってもいいでしょう。実際は、ノンバーバル（非言語的）コミュニケーションがかなり大切な役割を果たしていることは、多くの人に検証されているのですが。しかし、その言葉によるコミュニケーションにおいては、人と人とがお互いに理解し合うことをめざして、やりとりが行なわれるにもかかわらず、とても多くの障害をもっていることも周知の事実であります。人は、言葉によるコミュニケーションが困難になると、「百聞一見に如かず」という言葉を思い出し、「君も見てみたらわかるよ。」とか、「君も同じ場に遭遇するとわかるよ。」と言って会話を片付けてしまいそうになります。なぜなら、言葉という聴覚刺激だけではあいまいだから、実物（視覚情報）を提示すれば、それを見た人たちの間ではすべて共通の知覚が成立すると考えてしまいやすいのではないでしょうか。それでは果たして、見るという行為は、私たちの周りの出来事を十分に正確に捉らえ、共通の認識にいたるといえるのでしょうか。自分の目に映るまさにそのままの世界に私たちは住んでいるように思っているかもしれませんが、果たしてそうなのでしょうか？

## ◆現存する世界と見えている世界とは異なる

雪原を一人の旅人が歩いていて、その旅人の歩く姿を見てその土地の人は非常にあぶなかっしく見ていたという有名な話があります。その旅人が雪が降り

積もったところを道だと思って歩いていたのは、実は湖の氷面を歩いていたのです。土地の人にとって危ない湖も、旅人にとってはただ雪の降り積もった道に見えていたわけです。このような物理的な環境と知覚された環境との間にはズレが生じる現象はたくさん起こります。このことを、コフカ(Koffka,K.)は物理的な環境を地理的環境(geographical environment)と呼び、一方後者を行動的環境(behavioral environment)と呼び、二つの環境を識別しています。私たちは自らが知覚した環境、すなわち行動的環境の中で客観的事実と異なっていても何の疑いもなく、それが事実だと思い込み生活を営んでいるのです。いわば、一人ひとり外界の刺激を異なる仕方で知覚しながら、その主観的、行動的世界の中で人々とかかわっているといえるでしょう。

私たちの見ることの特徴には、さまざまなことが知られています。

### ◆図と地として知覚する

私たちがいろいろなものを見たり、聞いたりすることができるのは、刺激が受容器（目や耳など）を通して神経組織に興奮過程を引き起こし、感覚中枢に伝達されるからです。黒い服に墨を落としたとしてもあまり目立たないでしょうが、白いワイシャツにインクを落とした時には、その染みがよくわかります。これは一般にそのものがよりはっきり見えるには、その背景とそのものが区別されるに充分なぐらい対照的であるかどうかに関係しているのです。私たちは、あるものを見ている時は、一定の背景の中から当該のそのものを浮き立たせているのです。ルビン(Rubin,E.)は、図(figure)と地(ground)と名付け、一定の背景をもって知覚されたものが図となり、その背景が地であると考えました。

図１のルビンの盃は有名な絵です。まず、この図では、中央の盃が見える。そして、黒の部分に注意を向けて見ると、左右に２人の横顔が浮び上がってくる。盃が図として見えている時は、黒いところが背景になり、２人の横顔が図として見えている時には白い部分は背景となってしまうのです。同時に二つの図柄を見ることはできないのです。しばらく見ていると、両者が同時に見えたかのように思われるかもしれませんが、それはあくまでも白い部分が図になったり、黒い部分が図になったり、交

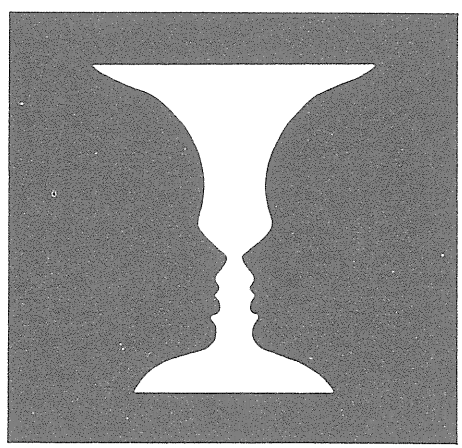

図１　ルビンの盃

互に図と地が繰り返し反転した形で見えているのに他ならないのです。こうした図は、図－地反転図形とよばれます。

意味的反転図形の有名な絵に図2があります。読者の方は、この図2で何が

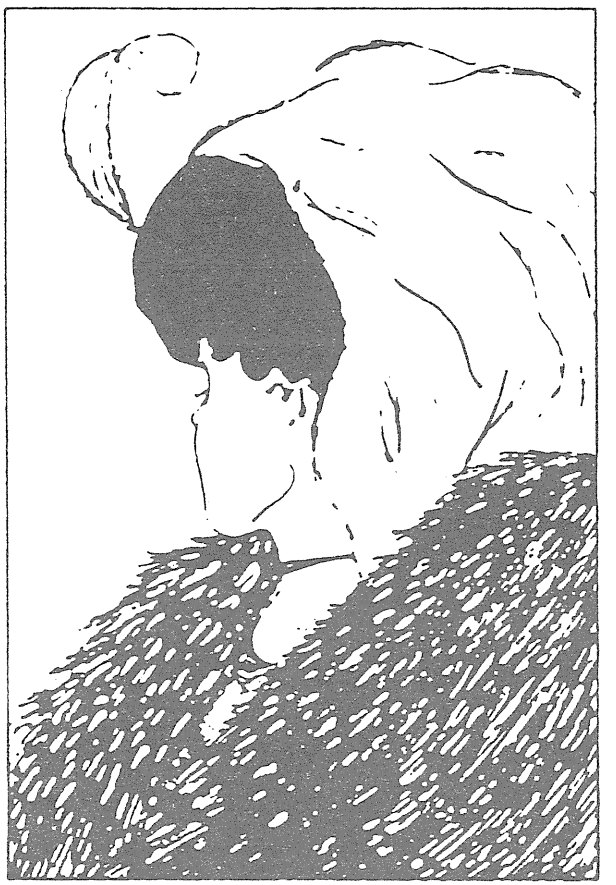

図2　老婆と若い女性

見えていますでしょうか。タイトルにあるように、若い女性か老婆が見えるはずです。挑戦してみて下さい。ただ、一度あるものに見えてしまうとなかなかその他の異なるものを見つけ出すことができないといったことも私たちの見る特徴としてあります。一度でき上がった偏見がなかなか修正できないなどといったこともこのようなことからも類推することができます。

刺激があいまいであったり、さまざまな意味に受け取れるような多義的な刺激であればあるほど、さまざまな見え方が起こり、いろいろな図が浮び上がってきます。これは、刺激の内容・提示のされ方などにより差異が起こりますし、一方、見え方を左右する要因として主体側の問題もいろいろと考えられます。

◆枠組みが見るものを変える

私たちが、さまざまなものを見るとき、なんらかの手がかりをもとに知覚します。図3で、このテキストの下辺を水平線とし電柱が垂直に立っているように見ると四角な窓枠は傾いてみえます。しかし、このテキストを少し斜にねかせて窓枠を垂直にして見ると、電柱は傾いているようにみえるでしょう。これは、私たちが何を基準にして見るかによってその見え方が異なる証拠といえます。このようにものを見る際の基準となるものを枠組み(framework)と呼びます。子どもが逆さまのものを描いたりすることからもわかるように観察者の発達レベルによっても、何を枠組みとして見るかいったことも異なることが推測できます。

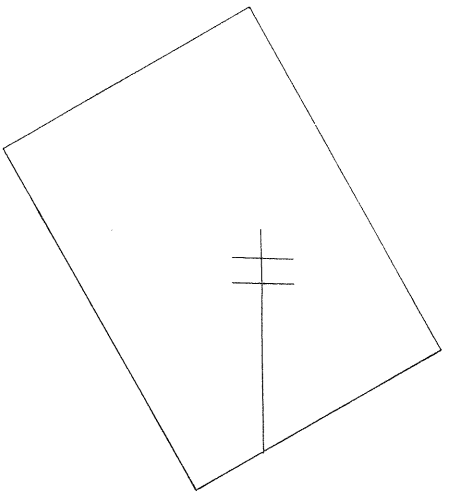

図3　枠組み

その他に、枠組みによって見え方が異なることを劇的に体験する絵として図4があります。テキストをこのまま見れば「老婆」に見えますが、

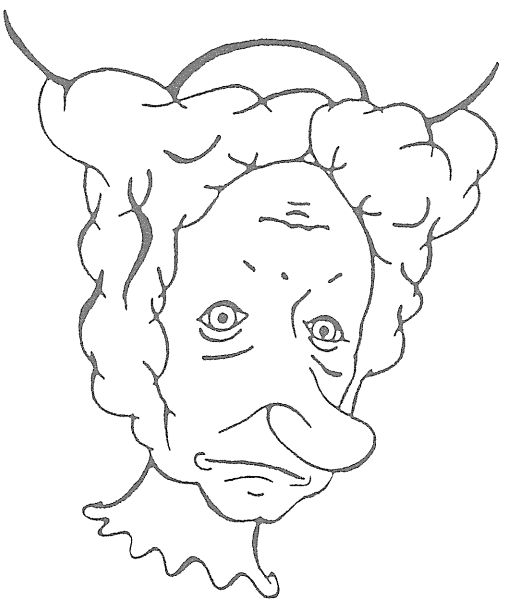

図4　老婆と王女(Kanizsa 1979より)

このテキストを逆さにして一度見てください。きっと「王女」に見えるでしょう。このことからも絵の見え方は見る際の枠組みによる影響が強いということが理解できます。遊園地のビックリ・ハウスでの体験も同様の現象から生まれるものです。自分自身はただ椅子に座っているだけなのですが、周りの壁・窓・天井などが回転すると、あたかも自分自身が回転しているように感じてしまうわけです。そして、このことからさらに言えるのは、日頃自分が経験していること、慣習化してしまっているものがその枠組みになりやすいのです。なぜなら、日常私たちは壁や窓が回転するといった経験をしていないからです。

### ◆見るとはいうけど、それは解釈

私たちが見るときのいくつかの代表的な特徴について記述してみました。その他に、見え方に影響を与える要因はいろいろと考えることができます。どのような文脈の中でそれを見るかによって、また見る側にどのような期待があるかなどによっても見えるものは異なってくるでしょう。それらの要因も広くは見る人がどのような枠組みで見ているかといったことに帰着させて考えることもできるでしょう。

このように考えてみると、見るということは目の前にあるものをいつもありのままに網膜に映っている映像を認知するだけでなく、その映像から私たちはさまざまな解釈を試みているのです。それを、知覚的推論とよんでいます。私たちは、過去の経験などにもとづいて、感覚情報を解釈しているわけです。それゆえ、どのように推論するか、解釈するかによって、人それぞれ見え方が異なってくるわけです。時には、私たちは見えないものまで見える経験をします。たとえば、夢を見るなどはそれにあたります。これは、まさに主体側の内的な要因が影響を与えて、そのような現象が起こるわけです。

このような現象を用いて、夢分析が行なわれたり、あいまいな絵を見せてその人の性格判断を行なおうとする試みに発展していくわけです。それは、その個人の内的な状態を投影させて見る傾向(projection)を利用しているわけです。

### ◆おわりに

このように見てくると、「百聞一見に如かず」の一見もいかに「一見でしかない」かということがおわかりいただけるでしょう。比較的シンプルな絵を見るだけでも、人それぞれに主観的な見え方をするわけですから、複雑な人間関係の場においてはなおさらです。あの人は、「せっかちな人だ」という枠組みをもっていて、その枠組みで見る限り相手の行動はせっかちに見えるでしょう。

偏見からなかなか抜け出せないのは、多くの場合、そのような現象として起こっているといってもいいのかも知れません。

これは、他者を見るときだけでなく、自分自身を見るときも同じことがいえます。「私は話すのが苦手である」という枠組みの自己概念をもっている人は、自分がやっているたくさんの行動の中でも「話すのが苦手な」行動や他者の反応の中でもその自己概念を確証するための他者の反応がきわだって見えてしまうのです。そして、そこから抜け出すことがなかなか容易にはできなくなってしまうのです。

Ｔグループなどの人間関係トレーニングでは、他者や自分、そしてグループをどのように見るかといったことが大切な学習の要素です。トレーニングの場では、自分に見えている世界をお互いに伝え合い、どれほど共有の世界を創り出すことができるかといったことが一つの課題といってもいいでしょう。また、相互に一人ひとりについて見えていることをを伝え合うこと－フィードバック－を通して、一人一人の他者に対する、また自己に対する枠組みを広げていくことに挑戦し、そしてトレーニングを通して柔軟な枠組みが生まれることを可能にしていくのです。

最後に、一人ひとりを大切にすること、すなわち『私たちは一人ひとりまさに主観的な世界で生きている』ということを忘れないで生きていきたいものです。

## 参考文献

Koffka, Kurt 1963 Principles of Gestalt Psychology. New York: Harcourt Brace Jovanovich.

Boring, Edwin G. 1930 "A New Ambiguous Figure." American Journal of Psychology, 42, 444-445.

斎藤　勇編 1983 人間関係の心理学　誠信書房

斎藤　勇編 1988 図説心理学入門　誠信書房